

「近江八景」の「堅田落雁」に描かれ、近江との縁が深い松尾芭蕉の「鎖明けて月さしいれよ 浮御堂」の句でも有名な浮御堂(満月寺)

は、平安時代中ごろの康保年間(964-987年)に源信によって創建されたと伝えられ、古代から今に至る琵琶湖と、そこを舞台に特別な位置を保ってきた堅田を見続けてきています。

昭和56、57年度に実施された浮御堂周辺の発掘調査では、堅田が隆盛を極めた平安時代から中世を中心に、7世紀から現代までの土器類などが多量に出土しました。そこからは、下鴨社領の御厨としての堅田と、これに基づく湖上特権を背景とした自由都市でもあった実像が浮かび上がってきました。

御厨としての堅田の生業である漁業を実証するものが、漁網には欠かせない土鍾(おもり)です。形態や重量か

土器が語る堅田の隆盛

ら、刺し網用と曳き網用に大別されます。室町時代後期の堅田を描いた絵図には四ツ手網漁の様子が描かれ、文献史料には「釣人」との記述も見られることから、多用な漁法による漁業を行っていたことがうかがえます。

注目されるもうひとつが、墨書土器と線刻土器です。平安時代の土器には、現在米原市に含まれる対岸の朝妻湊との関連をうかがわせる「朝妻」や「北村」といった地名ないし人名、「掃守下」「右坊」などの職名や施設を示すものが多くみられます。これは、ここに、文字を多用する行政的な機能を持つ施設があり、役人がいたことを示しています。

中世の墨書土器には、

浮御堂

「西」「上東」「中東」など方角や場所を示すもの、さらに「一」「二」「十」など数字を記す例が多くあり、記号には陰陽道の魔除呪文である「九字を切る」に通じると考えられる2、3本の縦線と横線を格子状に組み合わされる

ものが多く見られます。これらの文字や記号が書かれているのは、食事や饗宴に使用される食器類です。

このことから、方角や数字は、その食器類を供出した場所と数量を示していると考えられます。堅田の人々は、食

器を持ち寄り開催された饗宴で「共に飲み、共に食す」ことによって絆を深めたのでしよう。さらに、その場に集

まった人々や堅田の繁栄を祈って魔よけや招福の呪文を土器に書き、それを清め、祓う意味を持つ水を湛える湖中に投げ棄てたと考えられます。

16世紀後半の堅田は、堺と同じように強固な自治組織を持ち、「自由都市」と称されます。自治組織の基礎となる地域の連帯を形成するために宴が催され、器を琵琶湖に投げ捨てていたと考えられる、堅苦しい歴史も身近に感じることができます。

(滋賀県文化財保護協会 小竹森直子)



B178



古くから琵琶湖を見続けてきた浮御堂。周辺調査では中世を中心とした多量の土器類が出土した—大津市本堅田

びわこの考湖学

大量に発見された土器のなかには対岸の湊「朝妻」の地名が記された墨書土器もある